

巻頭言

2019年12月、新型コロナウイルス感染症（中国では新型コロナウイルス肺炎）が中国の湖北省武漢で確認され、猛威を振るい、瞬く間に世界中へと広がった。2020年2月12日、世界保健機関（WHO）は、この感染症の名称を「COVID-19」と決定し発表。さらに3月11日には、パンデミック（世界的大流行）であることを公表した。

1月末、中国の春節（1月25日）期間中に、中国工程院の張伯礼院士（天津中医薬大学学長）が、中央疫情防控指導組専門家組のメンバーに任命され、武漢に到着。その前後に武漢に入ったのは、国家中医薬管理局医療救治専門家組組長に任命された中国工程院の黄璐琦院士（中国中医科学院院長）、中央疫情防控指導組専門家組・国家中医薬管理局臨床救治専門家組組長に任命された中国科学院の仝小林院士（中国中医科学院首席研究員）、中央疫情防控指導組専門家組・首都医科大学附属北京中医醫院の劉清泉院長らで、彼らは2003年に中国でSARSが流行した際に、医療現場で活躍した医師らであった。

3月3日、国家中医薬管理局は『關於印發新型冠状病毒肺炎診療方案（試行第七版）的通知』を公表し、COVID-19の疫学的特徴・病理・症状・診断基準などをまとめ、さらに中医学に関する臨床分期と清肺排毒湯などを含む中医治療指針を提起した。

3月31日までの66日間、国家中医医療隊の医師らは武漢の各病院で、中医の理論に沿って中薬を用い、観察期、軽症・普通症の治療期、回復期中薬を投与し、重症・危重症の患者では中西医結合の治療に臨み臨床経験を積み重ねた。中国全土の感染者のうち74,187例（湖北省では61,449例）に中薬を投与し、使用率は患者総数の91.5%（湖北省では90.6%）を占めたといわれる。中医の介入によって有効的に症状は緩和され、普通症から重症に悪化するケースも減り、治癒率が高まり、死亡率は下がり、回復期には回復が促進されるなど、総有効率が90%以上を示したことで、中医の優位性がはっきりと示された。

4月に入り、世界中医薬学会連合会（世界中連）がWHOに「世界中のCOVID-19に対して中医薬の使用を推奨」することを提起し、さらに世界中連は世界の中医学家に向けて「専門家による中医薬抗疫経験インターネット会議」を複数回開催して、COVID-19に対する中医の経験を伝えた。

これらの講演の内容はどれも素晴らしく、ぜひCOVID-19によって逼迫する日本の医療関係者に紹介したいと考え、このたび、日本にいる中医学専門家14名による編集委員会を組織して講演会の内容を検討した。日本の医療に少しでも役立てることが

できれば、という願いは、われわれ日本中医協会のメンバー全員の気持ちである。今回、1カ月をかけて、張伯礼院士・黄璐琦院士・仝小林院士・劉清泉院長の経験を分析し、さらに『關於印發新型冠状病毒肺炎診療方案（試行第七版）的通知』を参考に、分担してまとめたのが本冊子である。日本の医療関係者のみなさまのお役に立てば幸いです。

日本中医協会会長 辰巳 洋